

皆さんお元気ですか。

2017年2月の出来事を綴っています。ご覧くださいます。



2月9日から13日まで、パナマ共和国のダビット市で行われたパナマ合気道講習会に参加した。参加者は約50名で、パナマ人が主だが、コスタリカ共和国やベネズエラからも参加者がいた。ニカラグアからは、私ひとりだけだった。会場は、コスタリカとの国境に近い所にある。私はマナグア空港からパナマ市に飛び、乗り換えてダビット市空港に着き、それからタクシーで約40分かけて、標高1300メートルほどある高原のリゾートホテルに来た。このホテルには、川下り、乗馬やハイキングコースなどのレジャー施設や武道講習会などの施設も備わっていた。日中は、暑いのが風邪も吹いていて、快適な気候だった。夜になると風が激しく吹き冬物のコートがないと過ごせないほど寒かった。日本から来られた指導者は、パナマでは今が一番良い季節だとおっしゃっていた。



今回の講習会で一人の日本人、Yさんに会った。彼は川崎市生まれで、ご両親の都合でパナマに移り、30年以上住んでいるとのこと。彼は日本語もスペイン語も堪能である。さて、彼とはパナマ人の性格について話をした。ニカラグア人は自分中心にしか物事を考えないが、パナマ人はどうか、と尋ねたら、中米の人々はほぼ同じだとの回答。そして、つぎのように説明してくれた。例えば、水道が壊れたので、修理人を午前中に頼んだとする。待てどもこない。午後になってもう一度電話で確認したら、午後3時ごろ行くとの返事。しかし、まだ来ない。こちらは、ズーと待っているが、遅れるとの連絡もこない。やっと5時ごろ来た。そして、修理人は途中で色んな用事ができ、遅れたと言い訳をする。こちらもズーと待っていたので、文句を言っても聞きいれない。修理人のほうがどうしてこんなに忙しく一生懸命働いているのに、同情してくれないのか、と言う。結局、よい方法は、修理人が自分の家に来たら連絡させ、そして、こちらがその修理人を待たせる方法を取ると言いい。とYさんが言った。「自分中心」という事が少しわかったような気がした。



2月11日、午後7時ごろから道場の近くの広間で、夕食をとった。この広間の近くにキッチン専用の建物があり、そこで、夕食を注文してこの広間に運んだ。この広間には、テーブルと椅子が用意されていた。そして、白い壁の前には、プロジェクターとマイクが用意されていた。これがこちらでのカラオケセットである。音楽は、パソコンで「カラオケ You Tube」サイトから検索して、それを白壁にプロジェクターで映していた。午後8時ごろから、料理を盛った皿をもってこの広間に続々と合気道仲間が入ってきた。そして、みんなが食事を楽しんだ。さて、食事も終わり今度は、カラオケである。壁に写った歌詞を見ながら、みんな歌っていた。コスタリカから来た、キリスト教牧師でもある合気道家も「川の流れのように」を日本語で歌った。上手かった。日本から来た指導者二人もそして私も驚いて、思わず拍手してしまったほどである。また。そのこの歌を聞いて、私も目頭が熱くなった。ニカラグアでの現実と懐かしい日本の事を思い出し、感傷的になった。日本に帰ったら、この歌を歌ってみたい。



カラオケは終わった。これでこのパーティも終わりかなあと思ったら、今度はダンスである。最初は数組のカップルが白壁の前の狭いスペースで踊っていた。それからしばらくするとリズムがアップテンポになり、テールの前のスペースは、踊る人たちでいっぱいになった。日本から来た指導員は、この講習会に何十回と来ているので、全体の様子が分かっているのか、自分の部屋に戻られた。私は、踊るつもりはなかったが、もうしばらくここでのみんなの様子を見たくて、しばらくいた。最初は見ているだけの合気道仲間たちは、前に出てそれぞれに躍り始めた。椅子に座って見ている人のほうが少なくなってきた。それでも私はその場で座り、ダンスの上手な女性の写真をズーッと撮っていた。そしたら、その女性が私の前に来て、私の腕を掴んで、私もその女性と躍ることになってしまった。こちらの人たちは、特に激しく体を動かすのではなく、ただ小刻みに足と腰を動かすだけである。それがなぜかリズムに乗っていて、うまい。生まれつきなのかなあ。



2月12日、講習会も終わって午後からパナマのコーヒー農園へYさんに連れってもらった。Yさんは、このコーヒー農園の社長とも仲がよくて、ここで作られたコーヒーを日本にも輸出したいとも考えている。農園は、講習会場から車で20分ほど行ったところにあり周りは、とんがった形の山々に囲まれていて、非常に景色のいいところだった。丁度この時期に収穫されたコーヒー豆は、コーヒー製造／販売所の前のコンクリート広場で乾燥されていた。この農園では、天日による自然乾燥で、機械は使わないとのこと。また、この地は、ほとんど雨が降らないので、立地条件も良いらしい。ここで働く従業員は、ほとんどが先住民らしい。コーヒー豆は、先住民たちが手で摘むらしい。12月ごろから従業員を雇う。その家族全員がこの工場近くに引っ越して来る。そして、この時期は学校も休みとのこと。この間、子供たちは、この敷地内にある簡易教室で英語や算数などを勉強するらしい。Yさんも一度英語を子供たちに教えたと言っていた。



農繁期が終ると従業員たちは自分の土地にもどり、そこでは簡単な農作業はするそうだが、ほとんど何もしないらしい。この農園主はオランダから来ているとのこと。ここの経営陣は、ほとんどが家族と親せきらしい。農園主は日本に行ったこともあり、特に京都が大好きらしい。日本人にここのコーヒーを飲んで欲しいと願っていた。私はここのコーヒーを頂いたが、本当に美味しかった。アメリカンのような薄さではなく、まろやかな味がした。小高い丘にある喫茶店でコーヒーを飲みながら、遠くの間々や澄み切った空をみるのは最高だった。本当にいいところに連れてきてもらって感謝している。ニカラグアに戻ったら、ここと同じような農園がきっとニカラグアにもあると思うので、探してみよう。